

2002. 7

広報 **ENIWA**

特  
集

漁  
源川の  
源流を  
訪ねて

# 漁川の源流を訪ねて



漁川——。  
あなたは、その源流を知っていますか。  
そして、そこにある景色にふれたことがありますか。  
今月は、  
真夏を前にして訪れた  
漁川の源を特集します。  
みんなで行く誌上疑似体験。  
それでは、さっそく  
出かけましょう。



まちを流れる漁川。今回はこの源流を探るのだ。

## 漁川の源流探訪。そのきっかけ

これから紹介していく「漁川・源流への旅」でもこれは最初から広報用に企画したものではなかった。きっかけになったこと。それは、広報広聴課の広報えにわ作成以外の大仕事、新しく作っていく市勢要覧の企画会議でのこんなやりとりだった。

「今回の要覧の特集テーマが『水』。ですから、全体の流れが漁川の源流の写真から始まるっていうのもいいですね——」。

それは広報広聴課が作成を委託した制作会社のデザイナー◎さんが発した一言。それを聞いたプロカメラマン◎さんは「源流の写真撮影」盤尻の山奥、という図式が頭に浮かんだのか、ちよつと戸惑いの表情を見せた。しかし、少ししてから◎さんはこう切り出した。「必要ならば行きます。案内してくれる詳しい人はいるでしょうか。探していただけですか。それと…、広報の人と一緒に行ってくれるんですね?」かくして『漁川・源流を訪ねる旅』には、広報広聴課からM主査とワタンが同行することになった。

## でも、漁川の源流ってどこにあるの??

市勢要覧の企画会議で源流撮影の話題が出るまで、それがどこにあるのかを

ワタンは知らなかった。「川のはじまりは恵庭岳から? 空沼岳から? まさか支笏湖からなんてね」という考えが頭の中を駆けめぐる。みんなで地図をのぞき込み、漁川をさかのぼっていくとまから盤尻の山の中へと、どんどん進んでいく。川を示す青い線が途切れていたのは漁岳の中腹。どうやら漁川の源流はそこにあるようだ。

## 助っ人探しと源流へ向かう準備

ワタンもM主査も山登りは素人。だから、その道の経験者の協力が必要となった。また、そこがどんな場所なのかを知るため、市役所職員の登山サークル「山の会」に所属する◎さんに話を聞いてみることにした。その話の中からほかのポイントが分かってきた。

①漁岳の登山は、林道ばかりを歩くのではなく、川が流れている沢を歩いていく。

②その沢には右がゴロゴロしていて険しい岩の壁も数カ所ある。

③ゴム底の靴では昔ですべるので、フェルトを貼るか、ワラジを履く。

そんな話を教えてもらいながら、◎さんには案内もお願いすることにした。参加者それぞれの日程を調整した結果、◎さんを隊長とする「漁川の源流撮影プロジェクト」の日程は、6月11日に決定。こうして、源流への旅は動き出した。



細い滝の横。手の先、足の先まで神経を集中させて、岩の壁をよじ登っていく。



▲大きな岩の間を大きな音を立てて流れる漁川。そこを縫うように進んでいく。



▲今回のスタート地点、通称『土場』。ワラジを締めて、さあ出発。



▲国道453号・奥漁橋から漁川を眺める。この川の最初の一滴を求めて旅は始まる。

## 6月11日、くもり。 出発は午前8時

6月11日午前8時、市役所前駐車場に集合し、「一路漁岳へ」と向かった。車を盤尻方面へと走らせ恵庭深谷へ。白濁の滝を過ぎ国道453号に突き当たったところで左折。そこから10㎞ほど支笏湖方面へ車を走らせると、漁川に架かる奥漁橋が見えてきた。その道路脇には『森水広場』があり駐車場もある。漁岳へはここから登っていくこともできるが、今回はワタシたちのような初心者がいて時間短縮も必要なことから、もう少し国道を走り、林道から森へ入った通称『土場』と言われている

るところからスタートすることになった。市役所前駐車場を出発してからおよそ40分。土場へと到着した。

### 漁川の源流。果たしてどんな写真が撮れるのか

「現地どんな写真が撮れるかは見当がつかないね」――。

これは出発前から話していたことだ。

④隊長たちの話によると、沢に流れ落ちてきた水が集まり、小さな流れをつくり、それがやがて川になるとい



う。わき水が

涸々とわき出ている雰囲気ではないため、「ここが源流だ」という場所はないらしい。ただ、漁岳の中腹が漁川の始まりであることには変わりがないというので、少し軌道修正し、今回の目的を源流部の撮影ということにした。

### いざ出陣。少し歩くと川の姿が見えてきた

土場からスタートして林道を歩いていくと川の音がすかすかに聞こえてきた。進むに連れてその音は大きくなる。やがて視界が開けて大小の岩がゴロゴロある川へと足を踏み入れる。進むラインを読みながら、すべらないように石

の上を歩いていく。川の流れる音、水が弾ける音に混じって鳥の鳴き声も聞こえてくる。良い経験だなあと思いつつも汗がしたたり落ちる。そうこうして進んでいくと、行く手には岩の壁が姿を現した。④隊長が先にながりロープを垂らしてくれる。それを頼りに目とつま先で足場を探しながら上を目指す。まさにロッククライミング状態。足をかけることなく見つからなくてちよつと慌てる。すかさず頭の上から「ゆつくり、ゆつくりね」という④隊長の声。焦りは禁物だ。なんとか無事に登り切り、そこで少し休憩。持ってきたワロン茶をゴクゴク飲む。んーうまい。休憩中、500mlのペントボトルを4本持ってきたことを話していると、M主査から「いっぱい持ってきたねえ」と半ばあきれたような言葉が。広報つくりのときでさえワロン茶をがぶ飲みしているワタシなのだから、そんなの当たり前やんけ」と心の中でM主査にツツコミを入れた。またゴクツと飲んだ。

そうして、まめに休憩を取りながら少しずつ目的地へと進んでいく。川の流れも次第に細くなり、周りには残雪が目立ち始めた。



難所の岩場。足場が少ないため、上の太い木に絡みついてロープが常時垂れている。それに身を預けて少しずつ上へ。



雪解け水が一流。また一流と岩にしみいる。漁川のはじまりが、ここにあった。



寒名伝って落ちる、ひとしずくの水。これも源の一つ。



少し開けた岩場で屋台はん。おにぎりほろまいけど、虫が・・・



▲行く手には、人の背丈ほどある残雷。それをよけるように進んでいく。

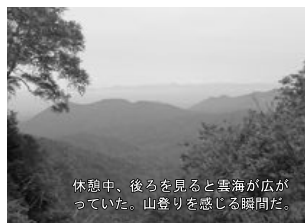


### 行く手には残雪 この辺りが源流部だ

土場を出発してから2時間余り。目の前の沢には残雪が一面に広がっている。あと40分くらい登ったら頂上だけだ、この辺りが「源流」って言えるところだね。①隊長がそう言った。岩場をすべらないような靴底に貼り付けてきたフェルトだと、雪の上は逆にすべって危ない。そんなこともあり、その地点を今回の最終目的地とした。プロカメラマン②さんは、背負ってきた重たいリュックからカメラや三脚を出して撮影の準備を始める。『残雪から落ちる一滴の水』を被写体にして③さんが構図を決めている間に、少し下から流れ出ている水に手を出してみた。『わっ！ すげえ冷たい！』。思わず手を引く。まるで冷蔵庫で一晩冷やしたくらいの水。そこには自然のままの水が流れていた。

### 撮影開始。しかしそこにいたものは・・・

構図が決まり、いよいよ撮影開始。でもそこには小さな難敵がいた。ハエのような無数の小さな虫たちである。手で追いついても、そこは彼らの住処



休憩中、後ろを見ると雲海が広がっていた。山登りを感じる瞬間だ。

うように飛んでいる。そこでM主査がおもむろにタバコを取り出し火をつけた。禁煙中のはずなのにどうしてポケットから出てくるんだろうと思いが、M主査を眺めていたが、それが効いた。タバコの煙を嫌うように虫たちがカメラの前からいなくなつたのだ。そんな最終目的地の風景がこの特集の一番最初、2ページに載っている男二人が残雪の前にたたずんでいる写真。右の男性が左手にタバコを持っていて、ただ一服しているのではないのだ。もちろん吸い殻は持ち帰った。そんな状況の中、場所を変えながら写真撮影は続く。数カットをカメラに収めた④さんからは「これで大丈夫」との言葉が出て無事終了。腕時計の針はもうすぐ正午を迎えることを知らせた。

ワタシたちが見た岩にしみいる水。一滴ずつ落ちるそれは、なんの変哲もない雪解け水かもしれない。しかし、実際に漁川に登り、次第に流れが細くなる姿をこの目で見た末に現れた。山の一滴は、まさに恵庭のまちに流れる漁川の始まり。魚が泳ぎ、鳥が遊び、木々が生え、人が集う漁川。その源がここにあった。



▲しみ出る水、雪解け水が集まって細い沢に流れができる。こうして川はまちに流れる。

